

# 最上地域の医療について



山形県立新庄病院長

最上町立最上病院長

八戸茂美氏

対談

佐藤俊浩氏

## 目指すは接遇の改善と人として繋がる医療連携

シリーズの最終回は、県立新庄病院の八戸院長と最上病院の佐藤院長との対談をお送りします。両院長は学生時代からの旧知の仲。学生時代の思い出話から、最上地域の医療にかける思い、二人が考える今後の医療の展望や、地域医療連携のあり方等について語っていただきました。

### 気の合う先輩、後輩

#### お互いの第一印象は？

**八戸** 私は、山形大学医学部（以下、「医学部」と呼ぶ）消化器内科（以下、「第二内科」と呼ぶ）に大学院生として入局し、同僚としてよく一緒にいたのが佐藤先生でした。言葉遣いがしつかりしており、「礼節を重んじる常識人」というのが、第一印象でした。  
佐藤先生は、単なるまじめ人間だけでなく、余暇時間の使い方がとても上手な方なんです。そんなところも気が合い、私と学生の捉え方、医療の本質などの価値観も共感でき、すぐに意気投合しました。

**佐藤** 高校時代、山形東高校で八戸先生の後輩だったのですが、  
八戸 仕事をすっかり終わらせてから、山形駅前によく飲みに行きましたね。懐かしい思い出です。  
佐藤 当時から八戸先生は、仕事の手を抜くことはせず、仕事は決められた時間内にきちんと終

わらせ、今でいう「ワークライフバランス」を充実させようと、全員で仕事をカバールし合って頑張っていた記憶があります。

### 我ら「接客評論家」

#### 余暇時間に接遇の研究

**八戸** 昭和60年代は、「ワークライフバランス」など当然なかった時代でしたよね。  
私も佐藤先生も決して授業の最前列でノートをとるような学生ではなかったと思います。学生時代に先輩方が特に口にしてきたことは、「医学生は、卒業後3年で人生が決まる。つまり卒業3年の研修の仕方、方向性」とんな医師になるか決まるという意味で、卒業後は、仕事に責任感を持って頑張りましたよ。当時は、礼節を重んじる時代でしたので、先輩の言うことは絶対でしたから、佐藤先生は仲間思いで、まだ仕事が終わらない仲間の分まで手助けしてあげてから一緒に飲みに行くというくらいに仕事ができる人でした。

その後、二人は「接客評論家」と称して、そのお店の接客の良さ悪しを評価しながら飲んでましたね。今思えば、当時から「接遇」の勉強をしていたことにな

ります。あの頃はとても楽しかったですね。（笑）

#### 佐藤 確かに、「接客評論家」というと、ただの遊びじゃん。と思う人は多いかもしれません

が、居酒屋で接客などを観察してきたおかげで、人を不快にさせない接遇とはどういったものなのかを学びました。それを病院の職員などに重ねたりして、「今の対応はダメなのではないか」と感じるのは、今になって活きていると思いますよね？  
日中は医師として、夜は「接客評論家」。ふざけているように思われますが、お互いに医療院として、「やるべきことはやる」大学院生でした。

### 教授の勤怠で、...

#### 移動先がその後の職場

**八戸** 私は佐藤先生みたいに色々な病院で働いたことがなく、地域医療よりも総合病院での医療のほうが長かったですね。元々、地元で働きたかった気がしますが強かったこともあるので、佐藤先生は函館市立病院に赴任されたことがありましたよね？  
当時は医師として腕を磨ける病院として有名でしたよ。

## 学生時代の経験が今に生きる



八戸茂美（64歳）

新庄市出身  
1958年10月13日生れ  
現山形県立新庄病院長  
出身高校：山形東高校

◇大学院卒業後、県立新庄病院で30年間勤務。消化器内科を専門とし、長年にわたり同病院で活躍。現在は新庄病院長として、手腕を発揮している。

### 次のページへ続く

**八戸** やはり、研修ということも考えたらずいとい大きい病院に行ったほうがいいと思いますね。でも、佐藤先生は地域のあらゆる病院をまわってきただけで、幅広く診察する技術を身に付けてきたのだと思います。だから地域医療をこなすことができるんですよ。

**簡単に紹介出来ない**

**最善を尽くす医療とは**

**佐藤** 私の経験からですが、昭和の末期に山形市の病院で、「わからないことがあっても自分で調べて解決するように」と病院側からよく言われたものです。簡単に患者さんを紹介することができない時代でしたので、自分ですごく悩んで、2つぐらい可能性を考えて、どちらに転んでも大丈夫な治療をして、寝ずの晩を過ごしたことも多々ありました。「患者さんに対して最善を尽くす」というのは、自分の医療技術でできることに責任を持ちながら最大限の努力をすることではないでしょうか。八戸先生はどうお考えですか？

**八戸** そうなんです。問題は将来の人口動態と、高齢者を含めた疾病構造がどう変化していくか、それらの患者さんはどこで診ていただくのが適切か、ということですね。

**佐藤** 確かに病院の数的なバランスはいいですね。

**八戸** ええ、いらっしやいますよ。ただ、コロナ禍を契機に、患者さんの受診動向も変わってきているのも事実です。受診控えがある一方で、感染症の基幹病院に一目散で殺到するケースもありました。見方を変えれば全国民が自らの健康管理への意識が一層高まった期間だったともいえます。

いずれにせよ病院運営は、その地域の患者動向に応じた対応をしていかなければなりません。新庄病院は急性期の基幹病

**八戸** 私も考えは同じです。地元に戻ってきた時の責任感、今でも忘れられませんね。誰しも地元に戻るときは、ベテランになってからと思うのですが、私の場合には医師とは言え、何も身につけていない状態で戻ってきたので、全て先輩方に聞くしかなくて、なにより早く仕事を覚えさせてください」という姿勢で仕事をしていました。

目の前の患者さんを相手に、間違った医療をしていないか常に不安でした。今でもその責任感を感じながら、自分ができることを考えて、教えてもらいながら、最善を尽くす医療を目指しています。

**佐藤** そうですね。しかしながら、慢性期医療では、最善の医療を尽くしても、求めていた結果が出ないこともあります。この点について、今の若い医師に伝えたいことはありますか？

**八戸** 私の経験を伝えるとしたら、高齢者の方が入院する際には、ご家族の方に「今お元氣に見えても、不意に呼吸が止まることがあり得ます」と必ず説明するようにしています。

**佐藤** やはり、そういったときに限って、家族が遠方にお住まいでトラブルになるケースがあります。

**八戸** 医療従事者の確保は、一朝一夕では得られないことを痛感しています。そもそも子供の頃から始まって、将来郷土を愛せるように育てられるか、いざ戻ってこようとした時の生活環境、子供を育てる上での教育環境はどうか等々考えると、これは医療現場だけでは到底解決できず、親、家族、学校、行政、最上地域全ての住民と一緒に考えて行かなければならない課題だとも思います。

そもそも、最上町に縁もゆかりもなく赴任した佐藤先生は、以後26年間最上町を愛して、ここで医療を続けてきてくれたことは素晴らしいことで、私が最も尊敬するところでもあります。最上病院には何気ないいつも、研修医の先生が派遣されているように見えるでしょうが、佐藤



佐藤 俊浩 (62歳)

**持てる技術で最大限の努力**

ますね。先生の病院でも、高齢者が長く入院して亡くなるケースはありますか？

**八戸** ありますね。家族にしてみれば、病院に入院していたのに「何故亡くなったのか？」と思いますよ、それは。

一方で、高齢者の方にどこまでの医療を選択してあげれば良いか、主治医にとっては大変重要なテーマだと思っています。

**佐藤** 確かに、全て最先端の医療をすれば治るのかという点、実はそうでもない場合が効果的な治療だったりもするんですよ。先ほどお話しした患者さんも、様々な処置を尽くしたのですが、上手くはいかず結局は治療がつき合わせて助かる患者さんも多いと感じています。それはそれで医療として成功しているのではないかと思います。

先生がたゆまなく母校の大病院の医局に働きかけをしてきたからこそその結果であると確信しています。

**佐藤** ありがとうございます。昔は、優秀な先生が最上病院にたくさん来てくれて、現在では考えられないくらい最先端なことをしていました。山形の医局から地域医療へ派遣された先生が、医師として一番鍛えられる場所が最上病院だったと聞いたこともありました。

そういった流れであれば非常に面白いことだと思いい、新しいことを一生涯懸命やっていたのですが、慢性期の病院に変わって来た頃から、そういうことから手を引きつつあります。しかし、優秀な先生が臨床的見地から考えても、本当に素晴らしいことをやっていた華々しい時代もあって最上病院の今があります。現在でも多くの研修医が、最上病院に来てくれるのは、こうした昔の山大との信頼関係と、地域医療を学ぶための研修病院として認識されているからだと感じています。

山形市出身  
1960年12月8日生れ  
現最上町立最上病院長  
出身高校：山形東高校

◇山形大学医学部消化器内科に所属。大学院卒業後、様々な地域の医療を経験し、平成9年4月から最上病院長に就任。地域医療の医師として、39年のキャリアを誇る。現在も内科医として診療にあたる。

家族の方も喜んでくれましたし、助かった患者さんには、これからも元気でいて欲しいと切に願っています。やはり高齢者の方の人生、それから家族の方に負担をかけない治療も考えながら、最善の医療を目指していく必要があるのではないのでしょうか。

**医療の存続は人材確保**

**最上地域の医療の変化**

**八戸** 最上地域における人口は総じて減少していくわけですが、75歳以上は緩やかに増加し、2030年頃からは減少に転じて、しばらくは後期高齢者の人口が増加していくという点ですね。地域医療という観点から最上地域を見たとき、当然ながら全国各医療圏で事情は異なります



▲研修医の先生の中には送別会で、皆さんに感謝の意を評して演奏などを披露してくれる先生もいました。毎年多くの研修医が地域医療を学びに来ています。

**医療連携の本質とは**

**理想の地域医療に向けて**

**佐藤** 多分、町民の皆様が一番関心のある内容だと思います。現在の状況も踏まえてお話しさせていただきます。

**次のページへ続く**



いよいよ  
**完成**  
です！

# 最上病院経営強化プラン

最上病院経営強化プランがいよいよ完成します！

その一部である行動指針を先行してお知らせいたします。更に詳しい概要につきましては、9月の全戸配布などで町民の皆様にお知らせする予定です。

町民の皆様から愛され続ける病院を目指して!!

## 行動指針

# 「高い技術、低い腰」

この行動指針は、これまで最上病院で取り組んできた急性期・回復期・慢性期医療の中でも、かかりつけ医としての役割を十分に果たすため、急性期医療体制を充実していくこと。そして、町民アンケート等の分析により明らかとなった課題「接遇力の向上」を柱としています。

### ～行動指針に基づく主な4つの取り組み～

1

#### 【増収・増患】

1. 「運営委員会兼経営改善会議」の強化
2. 医療収支比率及び経常収支比率の改善
3. 入院患者の増加に向けた施策の検討・実施
4. 患者の状況に応じた最適な在院日数と適切な診療報酬請求による増収の施策の検討・実施
5. 外来患者の増加に向けた施策の検討・実施

2

#### 【医師・看護師の確保と働き方改革】

医療従事者確保に向けた独自施策の検討・実施

3

#### 【患者サービス向上施策】

最上病院行動指針「高い技術、低い腰」の徹底で厚い信頼の獲得

4

#### 【経費の削減・抑制対策】

1. 職員のコスト意識向上、現場主体の経営改善の実施
2. 適正な人事管理による業務内容及び諸手当等の見直し
3. 経費の削減
4. 医療機器等の購入と更新計画

6月から本シリーズをご覧いただきましてありがとうございます。全3回シリーズの最終回では、新庄病院と最上病院の両院長の考えや、今後の方針などを町民の皆様にご覧いただき期待と考える企画しました。今後も最上病院をよろしくお願いたします。



トーに医療技術のさらなる向上と、職員の接遇改善を念頭に入れて「高い技術に、低い腰」を掲げて頑張っています。八戸院長には、今回の対談を引き受けていただき本当にありがとうございます。今後とも、人としてつながる本当の意味での「地域医療連携」を目指して共に頑張りましょう。

3か月にわたり、特集をご覧いただきありがとうございました！

シリーズ ～町民の健康を守る「まちの病院」の在り方を考える～



八戸 もちろんこれから「※医療DX」が進んでいく中、より効率よく情報交換をするシステムは重要です。でもあらためて、「地域医療連携」の本質を考え

佐藤 「地域医療連携」はすごく大事なことです。ですが、一般的な医師に「地域医療連携」というと、単に患者さんに紹介状を持たせて終わってしまうところが正直あります。「紹介状を書いて、あとは新庄病院に全てお願いしなす！」といった考え方は今後改めるべきですね。紹介後は町の病院も、新庄病院の医療に参画して、医療技術向上のために、新庄病院から指導をいただきながら、医師として研鑽を積んでいくことが、町民の皆様にとって必要な、喜ばれる病院ではないかと思えます。

## 連携は人とのつながり

八戸 現代のめざましい医学の進歩、めまぐるしい医療制度改革の中にいると、ややもすると「そもそも自分はなぜ医師になりたかったのか、どんな医師で、どんな医療の提供が理想だったのか」と自分の初心が揺らいでいたのですが、そんな中で自分なりの答えを見つけたと思つた矢先、昔、医学生の頃受けた

佐藤 そうですよ。もし、一人の患者様を救うための新たなテクニックがあるとすれば、その技術を学んでくれるだけの気持で、やっていかなければならないと思つてます。そうして積み重ねていくことで、最上病院で出来なかったことが、出来るようになり、「地域医療連携」は、紹介状を持たせて新庄病院に行ってもらうことだけではなく、地域として医療レベルの質を向上させていきながら、人とのつながりとして捉えていかなければなりません。

佐藤 新庄病院は、新病院移転がいよいよかけかかると思っています。地域医療連携のセクションも新たに設けられますので、引き続き最上病院の患者さんで、医療に迷うことがありましたら紹介させていただきますので、医療技術などを教えていただくだけでも、医療現場などを教えていただくだけでも、最上病院では接遇が課題となつていきます。そして、患者対応に最も重要なのが接遇です。ともに努力していき、こそ地域医療を盛り上げていくキーポイントだと思っております。今後ともよろしくお願いたします。

## 高い技術、低い腰

講義で一度は耳にしたはずなのに、忘却のかたにあって「ヒポクラテスの誓い」を見つけた。紀元前5世紀に既に「医の倫理」を明確に説かれていたことに驚きました。どうぞ興味のあの方は是非、一読してみてください。最上の医療はこれからの理想を追求できる伸びしろがまだまだあると思つていきます。共に頑張りましょう。

※医療 DX (デジタル・トランスフォーメーション)：医療現場において、デジタル技術を活用し医療の質の向上や効率化を図るものです。現在、厚生労働省は「医療 DX 令和ビジョン 2030」を掲げ、国を挙げて改革に取り組んでいます。例としては電子処方箋やオンライン予約システムなどがそれに該当します。